

24-3 おまけ（革命の引き金）

エンゲルスは「恐慌が政治的変革の最も強力な槓杆のひとつであることは、すでに『共産党宣言』のなかにも述べられており、『新ライン新聞』の「評論」でも1848年までを含めて詳論されています。しかし同時にまた、そのあとの繁栄の回帰は革命を挫折させて反動の勝利を基礎づける、ということもそこに述べられています。」（レキシコン⑧-[279] P289 ベルンシュタインあてのエンゲルスの手紙(1882年1月25-31日))と述べていますが、マルクスとエンゲルスは、「恐慌」と「繁栄」の政治への影響について、「恐慌」は「政治的変革の最も強力な槓子のひとつである」が「そのあとの繁栄の回帰は、革命を挫折させて反動の勝利を基礎づける」ものであると考えていました。

当時、マルクスもエンゲルスも「恐慌が政治的変革の最も強力な槓杆のひとつである」と考えていたが、不破さんの言うような『恐慌＝革命』説などっていませんでした。

そして、当時、マルクスとエンゲルスが「恐慌が政治的変革の最も強力な槓杆」と考えていたとしても、何の不思議ありません。理由は二つあります。一つは、当時の資本主義社会の発展段階、資本の蓄積段階からして、資本主義の危機を最も鮮明にあらわすものとして「恐慌」があったこと。もう一つは、マルクスも指摘しているように、危機に際して貨幣価値をまもることが第一に考えられ、危機を一層悪化させる政策がイングランド銀行でとられるなど、危機に対応したブルジョア経済学がまだ存在していなかったことです。だから、当時のマルクスとエンゲルスが「恐慌が政治的変革の最も強力な槓杆」と考えていたとしても、何の不思議もないことです。

そして、レーニンの時代の革命の引き金は「帝国主義」であり、現代の先進資本主義諸国の革命の引き金は「産業の空洞化」です。